

いずみさの昔と今 第290回

「泉佐野に残る家相図②」

都の選定の権威付け、思想的な補強という面でも利用された風水ですが、現在の風水に到るまで様々な変遷があり、また「四神相応」という概念は大きく変化したものです。近年、陰陽道に関する研究が進むなかで城郭や岩館にも風水説の影響がみえることがわかっていきます。この城郭などにみえる風水説で最も色濃くものが四神相応です。四神は青龍・朱雀・玄武・白虎の四体の聖獣を指し、高松塚古墳・キトラ古墳などの石室に描かれていたことでも有名です。「続日本紀」大宝元(701)年元日の記事を見ると藤原宮で四体の聖獣、日(太陽)・月を象った幡(どうば)と鳥形の幡(どうば)を立て、元日の儀式を行ったことが記されており、藤原京の時代から四神の概念があったことがわかります。また、四神は陰陽・五行説と深く関わっており、藤原京の幡も陰陽・五行説(陰・陽、木・火・土・金・水の五行で世界が構成されているという考え)に則って立てたことが指摘されています。現在の大相撲の部屋根も陰陽・五行説によって建てられています。今でも古代の呪術的思想が引き継がれていることがわかります。四神相応は、藤原京の頃には東西南北の方位が整ったことを指す意味で

使用されるほか、儀式において呪術的・思想的概念としても利用されたのです。この四神相応ですが、京都の観光マップなどをみると「平安京が四神相応の地に作られた」と記されるのが多く、その内容は青龍が東の川で鴨川、朱雀が南の池で巨椋池、白虎は西の道で山陰道、玄武が北の山で船岡山とされ、これが四神相応として認識されています。ところが「日本紀略」延暦13(794)年10月詔をみると「此の国山川襟帯、自然と城を作す。この景勝によりて新号を制すべし。宜しく山背国を改めて、山城国となすべし。(中略)、号して平安京と曰ふ。」とあり、前述のような川・池・道・山が四神に対応するといった考えは記されていません。当時の陰陽寮の陰陽師が行う風水術は、四神が青龍・白虎・朱雀・玄武で東西南北に対応するとは認識していても、それが川・池・道・山に対応するとは考えていなかったと思われるます。

こうした青龍・白虎・朱雀・玄武は東西南北の四神相応という考えが日本でも初めて登場するのは12世紀成立といわれる「作庭記」です。「作庭記」は、陰陽・五行説を中心とした陰陽道思想を庭造りに導入した陰陽師が書いた書物です。平安京では貴族の間にこの書物が広まったと思われる、屋敷の造営に利用されたようです。のちに寺院の建築にも転用され、13世紀になると「風水」という単語が登場します。「大小禅刹規式條々」という京都円覚寺が作成した古文書には、塔頭を開闢する際は、寺家・評定衆・奉行人など共に該当する土地の地相を相て、山門として風水が叶っているなら、寺家に中心し、沙汰を進めようと考えられます。日本遺産にもなった奥州藤原氏の中尊寺の鐘に刻まれた「中尊寺供養願文」には「吉土を占」、「竜虎」とあり地相をみて吉所を占い、四神が整う場所を選んで造立したことがわかります。江戸時代の家相は、古代・中世の風水の概念が復興したものといえるでしょう。

レイクアルスタープラザ・
カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、祝日(祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館)
開館時間
午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
入館料 無料



▲家相図作成に使用された方位盤と方位磁石(個人蔵)

京では貴族の間にこの書物が広まったと思われる、屋敷の造営に利用されたようです。のちに寺院の建築にも転用され、13世紀になると「風水」という単語が登場します。「大小禅刹規式條々」という京都円覚寺が作成した古文書には、塔頭を開闢する際は、寺家・評定衆・奉行人など共に該当する土地の地相を相て、山門として風水が叶っているなら、寺家に中心し、沙汰を進めようと考えられます。日本遺産にもなった奥州藤原氏の中尊寺の鐘に刻まれた「中尊寺供養願文」には「吉土を占」、「竜虎」とあり地相をみて吉所を占い、四神が整う場所を選んで造立したことがわかります。江戸時代の家相は、古代・中世の風水の概念が復興したものといえるでしょう。

日本遺産・中世日根荘を巡る⑦ ～絵図編(6)「井川・八王子」～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち—中世日根荘の風景—」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介しします。

問合せ先 文化財保護課



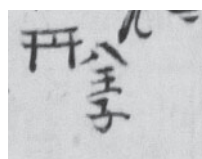
井川(ゆかわ)は、土丸地区を通る樫井川古川橋付近で取水し、日根神社・慈眼院境内を経て十二谷池に注ぐ全長約3キロの用水路です。開削時期は諸説あり、室町期には遅くとも存在したと考えられていますが、日根野村全体の用水路として大きな役割を果たし、現在もその役目は継承されています。高低差をわずか3mで流れるようにつくられており、当時の技術力には目を見張るものがあります。井川は2枚の絵図には描かれていませんが、「政基公旅引付」に入山田川から取水し、日根野村を灌漑する用水についての記述があります。現在の井川、ほぼコンクリート三面貼りの水路に改修されていますが、慈眼院境内のみ石積護岸が残っており、本来の姿を今に伝えています。

絵図に「八王子」と書かれた場所は、井川から分流して「ゆば川」水路につながる分岐に存在する神社であった可能性が高いと考えられています。社殿は不明ですが、現在は八王子旧跡の石碑が立っています。



◀井川

▼慈眼院境内を流れる井川



▲日根野村絵図に記された「八王子」

▶八王子旧跡

※絵図の写真是、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用(原本は宮内庁書陵部所蔵)